

山村美紗

長編推理小説

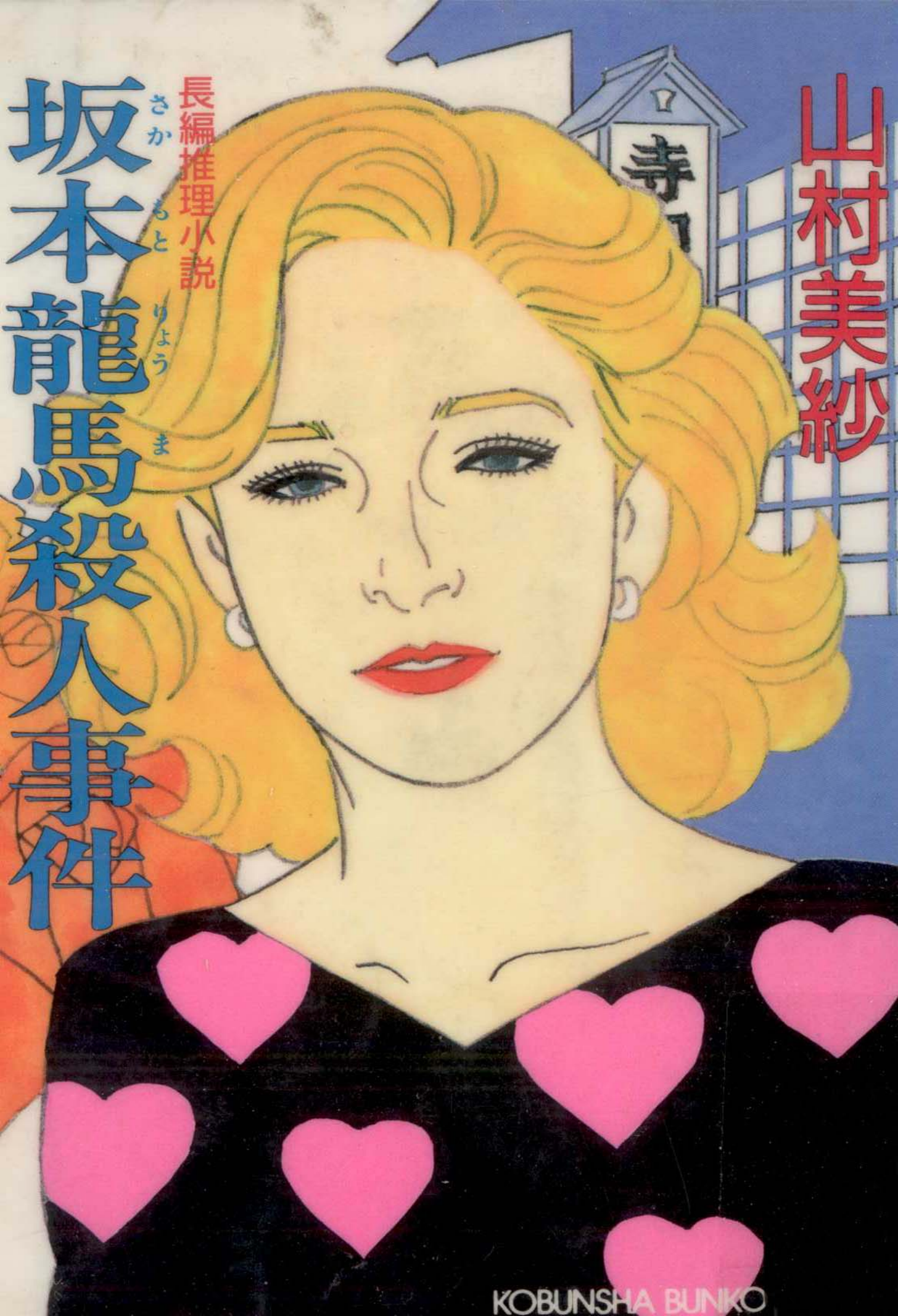
さか

もと

りょう

ま

坂本龍馬殺人事件



KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

長編推理小説

きかもとりようま

坂本龍馬殺人事件

著者 山<sup>やま</sup>村<sup>むら</sup>美<sup>み</sup>紗<sup>さ</sup>

1994年7月20日 初版1刷発行

発行者 大坪昌夫

印刷 萩原印刷

製本 関川製本

発行所 株式会社光文社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(3942)2241(代表)

振替 00160-3-115347

© Misa Yamamura 1994

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71901-5 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

長編推理小説

さかもとりょうま  
坂本龍馬殺人事件

山村美紗



光文社



坂本龍馬殺人事件 目次

第一章 龍馬りょうまの墓

5

第二章 第一の死

30

第三章 第二の殺人

60

第四章 容疑者たち

82

第五章 龍馬をめぐる女

108

第六章 捜査本部

133

第七章 女性関係

154

第八章 第三の死

177

第九章 真犯人

202

解説 郷原 宏

222



## 第一章 龍馬りょうまの墓

### 1

秋になり、大学が学園祭になったので、浜口はまぐちは、久しぶりにキャサリンを訪ねることにした。キャサリンは一週間ほど前、東山ひがしやまのマンションに転居していた。

「来年には父も日本に来るといふし、荷物も増えてきたから、少し広いマンションに移ろうと思うの」

と、キャサリンがいつてきたのが二週間前で、一週間後には、もう新しいマンションに越してしまったのだ。

5 浜口も手伝うつもりだったのだが、秋の学会があったりして、とうとう行かずじまいだった。

何か家具を転居祝いにしたいと思ったが、どんなものがあるのかわからないので、とりあえず花束を持って家へ行くことにした。

キャサリンの新居は、ひがしおおじ東大路を東山安井やすいから山手に上がっていったりょうざん霊山町というところにあつた。

風致地区の規制のある京都には珍しく白い大きなマンションである。

玄関の部屋番号を押すと、キャサリンの聲がして、戸が開いた。オートロック方式である。

そこからエレベーターで、五階に上がる。キャサリンの部屋は501号だった。

部屋のチャイムを鳴らすと、キャサリンがとび出してきた。

「イチロー、来てくれたのね」

「引越しを手伝えなくて申しわけありませんでした」

「いいのよ。このごろは、プロの人がちゃんとやってくれるから」

キャサリンは、浜口を中へ招じ入れた。

「広いダイニングですね。それに明るい」

浜口は、ワインレッドのじゅうたん絨毯を敷きつめた部屋を眺めながらいった。

「家具はすべてホワイトにしたの。どうかしら？」



「すてきです。戸棚、テーブル、よく揃えましたね。何かない家具はありませんか？ お祝いに僕が贈りますよ」

「ありがとうございます。じゃあ、下駄箱げたくれる？ 探したのだけど、ホワイトがなくて」

「お安いご用です」

二人は、和室やベッドルームなどを見てまわった。

「ベッドもホワイトにしたの」

「いいですね。ドレッサーも買ったんですか？」

「イエス。前の家具はみんな、次にあの家に入る学生さんにあげてきたのよ」

「こうして家を替わると、気分も一新しますね。僕も替わろうかな？」

「それがいいわ。でも、イチローは本がたくさんあるから大変ね」

バスルームやキッチンなどを見てまわったあと、二人はダイニングルームのソファに腰かけた。

「はい、とりあえずはお花」

「ありがとうございます、早速生いけるわ」

キャサリンはよろこんで、花を大きな花瓶に生けた。

「なかなかいいところですね。近くには、清水寺きよみずでらや高台寺こうだいじもあるし、さっき歩いてきたんですが、坂本龍馬さかもとりょうまの墓石などもあって」

「サカモトリョーマ？ それどんな人なの？ 昨日、道を歩いていたたら、若い女性が、サカモトリョーマのお墓はどこにあるのですかときいていたけど」

「えっ、キャシイは、坂本龍馬を知らないんですか？」

「大臣か何かなの？」

「違いますよ。維新いしんの志士ですよ」

「イシンのシシ？」

浜口は、キャサリンにわかるように説明した。

「明治維新って前に話したことがあるでしょう？ 明治の年号になる前、日本は長いこと徳川とくがわ幕府がおさめていたわけです」

「知ってるわ。將軍でしょう？ テレビの時代物でよく見てるわ。暴れん坊將軍とか、水戸黃門みとこうもんで、トクガワヒデタダとか」

「そう、そうなんですよ。徳川幕府が天下の権力を握り、政治をしていたんですが、日本には、ずっと続いてきた天皇家というものがある。それで、幕府から天皇へ政治の権力を返さないと

いけないという勤皇きんのうの人たちと、佐幕さぼくの対立がおこり、いろいろな人が殺されたり、闘ったりしたあと、明治になったんです」

「ミスター・サカモトは、どんな人だったの？」

「彼は、維新のすぐれた指導者の一人だったわけですが、維新の指導者の中では、珍しく、武士の持つ窮屈きゆうくつさはなく自由な人物で、だからこそ庶民の英雄として、今も人気があるんでしょう。彼は、三十二歳のとき、同志の中岡慎太郎なかおかしんたろうとともに、京都の近江屋おうみやで暗殺されています」

## 2

「誰に殺されたの？」

「いろいろ、説がありますね。最初は、近藤勇こんどういさみのひきいる新選組しんせんぐみだという説がいちばん有力でしたが、明治三年になって、五稜郭落城ごりやうかくによって降服してきた、京都見廻組みやわりぐみ、今井信郎いまいのぶおの『刑部省口書けいぶしょうぐわしきょう』によって、佐々木唯三郎ささきたださぶろう、今井信郎たち七人の見廻組の仕業しわざだということになりました。しかし、味方に殺されたのだらうとか、いまだにたくさんの説がありますね」

「面白いわ。一緒に殺された中岡シンタローという人は、いくつだったの？」

「数え年でいうと、龍馬が三十三歳、中岡は三十歳ということですから、今の満年齢でいうと、三十二歳と二十九歳ですね」

「若くて死んだのね。龍馬ってハンサムだったの？」

キャサリンが目を輝かせた。

「さあ、写真を見てキャシイが判断してください。瘦やせて、純粹な若者という感じで、まあハンサムでしょうね。テレビや映画では、きりっとした二枚目俳優が彼の役をやっていますよ」

「すてきだわ。でも、彼は、剣術はできなかったの？ そのころの人って、みんな剣の名人でしょう？ 敵を斬きり倒すことはできなかったの？」

キャサリンは、不思議そうにいった。

「もちろん、剣の達人でしたよ。それにピストルも持っていた」

「えっ、ピストルを？」

「有名な彼のエピソードにもそのことが出ています。龍馬は、ある仲間の志士が長い刀を持っているのを見て、『そういうのを無用の長刀というのだ。いざというときには、あまり役に立たない。自分はこれを愛用している』といって短刀を見せた。それをきいて、その男は、長刀

を捨てて短刀に切り替えた。すると、次に会ったとき、龍馬は、ふところからピストルを出して一発撃って見せて、『このほうがはるかに役に立つ』といったそうです。しばらくして、その志士が彼に会うと、龍馬は、ピストルの代わりに、万国公法の本を出して見せ、『武力のみでは、国家は立ちゆかない、学問が必要だ。今、これを読んでいるが、こんなに面白いものはない』といったといいます」

「随分先を見る目を持った人だったのね。でも、それでは、ピストルを持ってなかったんじゃないかしら？」

「今のは、後年の作り話かもしれません。でも、龍馬の持っていたピストルはスミス・アンド・ウエッソンですが、これが残っていますし、ピストルを持っていたのは、事実のようですよ」

「それでは、どうして、そんなに簡単に殺されてしまったの？ ああ、わかった。二人とも眠っているところを襲われたのでしょうか？」

「いや、違うようですね。僕もよくは知りませんが、龍馬の殺されたのは十一月十五日、奇しくも彼の誕生日ということになっています。その日……」

「まあ、誕生日に死んだの？」

「その日、訪ねてきた中岡との間で、いろいろ論議がかわされたようです。中岡と彼とは、統一国家を樹立するということでは、意見が一致していたけど、少し考え方に食い違いがあったようなんです。中岡は、きよへいとうぼく拳兵討幕、つまり、戦いこそが、体制変革の基礎であると考えていたのに対して、龍馬は、武力による対決は手段でしかないと考えていたんです」

「そういう意見を闘わすところそ必要だし、若い人らしいと思うわ。私は、龍馬のほうに賛成だけど」

「とにかく、二人は、夕食も忘れて、こういう意見を闘わしていたのだと思います。九時前になって、龍馬はおなかがへったのを思い出したのか、途中から同席していた本屋の息子のみねきち峰吉に、しやも軍鶏を買いにやらせた。もう一人の同席者である岡本健三郎も、それを機会に帰っていった。刺客が来たのは、それからすぐだということでした」

「そのとき、外へ出た二人がスパイだったということはないのかしら？」

キャサリンが、目を輝かしながらいった。

「まあ、待ってください。そのあと、とつがわ十津川の郷士と称する三人の男が、龍馬に面会したいとやってきた。下男がその名刺を持って階段を上がっていったとき、刺客は、その下男をうしろから斬りつけた」

「そのさわぎは、当然、二階にいた二人にきこえたわけでしょう？」

「ええ。しかし、その物音をきいた龍馬は、そこに刺客が来ているとも気がつかず、『ほたえな』と、どなりつけたといいます」

「ほたえなっていうのは、方言かしら？」

「ええ。やかましいなあ、さわぐなというような意味の土佐弁なんでしょう」

「トサってどこ？」

「四国の高知のことです。彼らは高知の出身ですから」

「わかったわ。それからどうなったの？」

キャサリンは、じつと浜口を見つめた。

### 3

「そこへ刺客がとび込んできて、二人は、刀をとって応戦する間もなく、斬りつけられたとい  
います。龍馬は、顔と肩と頭の三カ所を斬られ、中岡も身につけていた短刀で応戦したが、斬  
り伏せられたといえます」

「ちょっと待って。それはおかしいわ。私、時代劇のテレビドラマをよく見ているけど、階段から刀を抜いた三人がかけ上がってきたら、とっさに、刀をとって構えるものじゃないかしら？ 剣の名人だったら。それにこっちも二人いたのに、相手の一人も斬り殺せないで逃げられてしまうなんて、どういうことなの？ 相手がよほど剣の名人ならともかく」

「さあ、そこところは、わかりませんね。人間って、とっさには何もできないものかもしれないよ。力道山りきじょうざんのような強い人だって、なんの力もないチンピラに殺されたんですから。力道山って知ってるでしょう？ いつか、テレビを見てたら出てきて、キャシーに説明した……」

「ええ。知ってるわ。プロレスラーで、すごく強い人だったのよね。それで、二人は、簡単に死んでしまったの？」

「家人けにんたちは、ただちにすぐ近くにある河原町かわらまちの土佐藩邸や白川村しろかわの陸援隊りくえんたいに知らせ、藩邸からは谷干城たにたてきたちが、そして、陸援隊からは田中顕助たなかけんすけがかけつけ、医者を呼んだんですが、龍馬はすでに死んでいたそうです。頭からは、脳が出ていたといいます」

「まあ、中岡さんのほうは？」

「一命をとりとめて傷の手当てを受けたのですが、結局回復せず、十七日の夕方に亡くなった



のです」

「そうなの」

しばらく考えていたキャサリンは、アメリカ人らしい率直さで浜口にいった。

「ねえ。推理小説だったら、こういうことも考えられるわ。龍馬と中岡さんは、意見が違ってたんでしょう？　そして言い争いになり、中岡さんが龍馬を斬ったのでは？　突然に。でも、龍馬も最後の力を振りしぼって、彼に斬りつけた」

「つまり相討ちということですか。でも、下男も殺されているんですよ」

「それも、自分が彼を斬ったことがわからないように、中岡さんが、音をきいて上がってきた下男を処分したのでは？」

「推理小説としてはあり得るかもしれませんが、そういうことをあまりいわないほうがいいですよ。龍馬とともに中岡慎太郎を熱狂的に支持している若者も多いですから」

「それは、それぞれの勝手だわ。龍馬を熱狂的に好きな人もいれば、嫌いな人もいるし、誰に殺されたかを推理する人も、いたっていいでしょう？」

「アメリカ人ならそうかもしれないけど、日本人はそうはいかないですよ。だから、内部説などはあまり好まれない。彼は、英雄で、彼の志こころざしのために敵に殺されたのであってほしいわ